

研究者：岩崎 理浩（所属：朝日大学歯学部 口腔感染医療学講座 社会口腔保健学
分野）

研究題目：朝日大学病院の入院患者における口腔アセスメントガイドのスコアと低栄養状態の有無との関連の検討

目的：

近年、歯科医療従事者が行う入院患者等への口腔機能管理が注目されており、周術期における歯科医療や専門的な口腔健康管理へのニーズが高まってきている。国内で使用される代表的な口腔内アセスメントツールに、Oral Assessment Guide（OAG）があるが、OAGのスコアと入院中の合併症リスクに影響する全身の栄養状態との関連は未だ不明である。そこで本調査では、朝日大学病院の入院患者のOAGスコアを測定し、栄養状態を反映する指標である血清アルブミン値との関連について検討を加えることを目的とした。

対象および方法：

平成29年11月から平成30年2月までの4ヶ月間に、朝日大学病院に入院した514名（男性267名、女性247名、平均年齢 68.5 ± 19.4 歳）を対象者とした。研究協力者の歯科衛生士が、入院後すぐにOAGを用いて口腔状態を評価した。また、入院時に採血を実施し血清アルブミン値を測定した。

統計分析では、2群間の比較にカイ2乗検定とt検定を用いた。さらに、血清アルブミン値を従属変数、年齢、性別、BMI（body mass index）、かかりつけの歯科医の有無、経口摂取の有無及びOAGを独立変数とした重回帰分析を行い、関連性を検討した。

結果および考察：

対象者のOAGの平均値（標準偏差）は、9.3（ ± 1.7 ）だった。血清アルブミン値を基に健常者（3.5mg/dL以上）と低栄養者（3.5mg/dL未満）に分けた場合、低栄養者は健常者と比べて、年齢とOAGスコアが有意に高く（ $p < 0.05$ ）、経口摂取の割合、BMI、およびかかりつけ歯科医がいる割合が有意に低かった（ $p < 0.05$ ）（表1）。また、重回帰分析の結果、各要因との調整後もOAGと血清アルブミン濃度との間には有意な負の相関（ $\beta = -0.14$ 、 $p < 0.01$ ）を認めた（表2）。

入院患者においてOAGのスコアが高くなる程、血清アルブミン濃度が下がることが分かった。この結果は、OAGのスコアが悪化している患者程、全身の栄養状態が低下していることを示唆している。すなわち、OAGを改善させるような歯科的介入は、入院患者の良好な栄養状態を保つために重要であると推察される。

表1 対象者特性

	健常群 (血清アルブミン値 3.5mg/dL 以上)	低栄養群 (血清アルブミン値 3.5mg/dL 未満)	P 値
性別* (男性%)	51.4	53.3	0.700
年齢† (平均値±標準偏差) (歳)	64.7 ± 20.4	77.7 ± 12.5	< 0.001
OAG スコア† (平均値±標準偏差)	9.0 ± 1.5	10.1 ± 2.1	< 0.001
経口摂取の有無* (有%)	90.9	71.7	< 0.001
BMI † (平均値±標準偏差) (kg/m ²)	23.1 ± 4.2	21.5 ± 4.1	< 0.001
かかりつけ歯科医の有無* (有%)	60.8	48.0	0.008

* ; カイ 2 乗検定、† ; t 検定

表2 重回帰分析の結果

指標	偏回帰係数	標準偏回帰係数 (β)	P 値	95%信頼区間	
				下限	上限
定数	4.18		< 0.001	3.58	4.78
性別 (女性)	0.04	0.03	0.532	-0.08	0.15
年齢	-0.01	-0.28	< 0.001	-0.01	-0.01
OAG スコア	-0.06	-0.14	0.003	-0.1	-0.02
経口摂取の有無 (有)	0.37	0.12	0.004	0.2	0.53
BMI	0.02	0.12	0.003	0.01	0.03
かかりつけ歯科医の有無 (有)	0.18	0.2	< 0.001	0.06	0.3

調整済 R²=0.224、ANOVA p < 0.001**成果発表：**

1. 大島亜希子、野村玲奈、川口千治、松原恵子、横矢隆二、岩崎理浩、村松泰徳、友藤孝明。
入院患者における血清アルブミン値と OAG との関連について。第 24 回 日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会、2018 年 9 月 8 日 -9 日、仙台。
2. 野村玲奈、大島亜希子、岡 直子、久世恵理子、小島沙織、長屋優里菜、松原恵子、岩崎理浩、村松泰徳、友藤孝明。入院患者におけるかかりつけ歯科医の有無と栄養状態との関連。日本歯科衛生学会第 13 回学術大会、2018 年 9 月 15 日 -18 日、福岡。